
 学 会 記 事

第13回新潟救急医学会

日 時 昭和60年7月6日(土)
午後2時～4時30分
会 場 新潟大学医学部大講堂

一 般 演 題

1) 灯油肺炎の3症例

永山 善久・佐藤 雅久 (新潟市民病院)
阿部 時也・高野美紀子 (小児科)
小田 良彦

灯油誤飲による化学性肺臓炎を3例経験したので報告した。症例は1才5か月から2才までの乳幼児であり、家庭における不注意な保管にもとづく誤飲が原因であった。症例1は意識障害・低酸素血症を伴う重症例であったが、早期より積極的にステロイドを投与することによって改善がみられた。症例2及び3は、ラ音は聴取されたが全身状態は良好であり、ステロイドの投与を受けず軽快した。症例1・2では10000/ μ l以上の白血球増多があり、症例1ではLDH 1015u/lと上昇していたが、CRPはいづれも陰性であった。症例3の胸部X線写真の変化は軽微であり、症例2は右下肺野に吸引型浸潤影を呈した。症例1は当初吸引型陰影を呈したが、後に両側肺門部を中心とする水腫型浸潤影と変化した。

以上3例をふまえ、灯油肺炎の年齢分布、症状、胸部X線所見、肺病変の発生機序、治療等につき、若干の文献的考察を行った。

2) 最近経験した外傷性急性腎不全の3例

小林 弘之・岡田 義信 (新潟大学)
鈴木 享・下条 文武 (第二内科)
荒川 正昭

最近当科において経験した外傷性急性腎不全の3例を報告する。

症例1:5才男児。二階より転落して脾臓破裂をきたし、その後無尿状態となり血液透析を開始した。原因は出血性ショックによると考えられた。

症例2:17才男性。交通事故により骨盤骨折および後腹膜血腫をきたし、急性腎不全を呈し、血液透析を開始

した。本例は、血清ミオグロビンおよび筋逸脱酵素の高値が認められた。原因として出血性ショックおよび rhabdomyolysis が考えられた。

症例3:73才男性。自宅トイレで転倒し両側肩関節を脱臼。その後無尿状態となり血液透析を開始した。本例は両側肩部に広範な皮下出血斑が認められ、また血清ミオグロビンおよび筋逸脱酵素の異常高値がみられ、rhabdomyolysis による急性腎不全と考えられた。

症例1および2はその後透析を離脱しているが、症例3は敗血症を併発し死亡した。

教 育 講 演

薬物中毒の治療

—特にパラコート中毒について—

新潟大学第二内科教授 荒川 正昭先生

特 別 講 演

広範囲熱傷の治療

日本医科大学救命救急センター

救急医学科助教授 辺見 弘先生

広範囲熱傷の病態解明とともに、いわゆる熱傷ショック期は適切な循環管理により大部分の症例で離脱可能となってきた。

しかし引き続き、異化亢進期は細菌感染に基く合併症の頻度が高く、救命率も満足すべき成績には至っていない。救命率向上を図る対策として、創面の再上皮化するまで長期間続く、異化亢進期を創が明らかなⅢ度熱傷であれば植皮により早期に閉鎖するとともに、異化亢進の進行を十分なカロリーと窒素の投与で抑制することである。

我々の施設における基本的治療方針として

- 1) ショック期は適正な輸液管理でショック状態を遷延させないこと
 - 2) 合併症の早期発見、とくに気道熱傷については予防的な治療も必要であること
 - 3) 十分な栄養管理を行い、栄養的なショック状態に陥いれさせないこと
 - 4) 早期植皮による創面の閉鎖すること
- 以上について我々の経験を述べた。